

教育研究所だより

令和6年(2024年)

11月号

(通算255号)

き どう 輝 動

(きどう:子どもが輝き、躍動するまち)

近江八幡市教育研究所

TEL 0748-36-5574

FAX 32-3352

メール

044800@city.omihachiman.lg.jp



読書活動に主体的に取り組む生徒の育成とその方策 ～全校集団作りを通して～

近江八幡市立八幡東中学校
校長 伊丹 稔

本校においてはこれまで、生徒指導を大きな課題として、その解決に向けて取組を進めてきました。その中で取り組んできたのが朝読書の時間の充実です。朝読書の時間の実践は、読書習慣を身につけること、そして心を落ち着かせて学習を始めることなどの効果を期待して、全国的にも取り組まれている学校も多く、本校においても継続して取り組んできました。

近江八幡市が子どもの読書活動の充実を重点施策として進める中で、これまでの本校の取組を振り返り、生徒の実態を踏まえて、生徒がさらに主体的に読書活動を行う方策のひとつとして「全校ビブリオバトル」に取り組むことにしました。

「ビブリオバトル」は自分の読んだ本の魅力をみんなに紹介するそのパフォーマンスを通して、単に本の紹介だけでなく、その後の質疑応答を踏まえて、聞いた人がどの本を一番読みたくなったかを競うものです。この活動を通して、全校生徒が読書に取り組む意義を見出し、発表する力、聞く力、コミュニケーション力をつけるために有効な取組になると考え、国語科の授業から始まり、学年集会、全校集会を進める中で、生徒会が主体となって進行を務める形で実施してきました。さらに学校司書にはビブリオバトルの講評を通して助言してもらおうなど、積極的に関わってもらいました。ビブリオバトル後には、紹介された本を昇降口に展示し、貸し出しを促して、生徒の読書意欲を高める工夫をしました。

また生徒会活動の図書委員会では、委員長・副委員長の進行で「読書ニュースの時間」を給食時に各学級へオンラインで配信し、ゲストに先生、学校司書、生徒を招いておすすめ本を定期的に紹介する機会を設けてきました。今読んでいる本やお気に入りの本を紹介するとともに、図書室にある本の中からおすすめ本を紹介することで、昼休みに図書室に足を運ぶ生徒が増えることを狙って取組を進めてきました。

これらの取組には、本校がここ3年間に取り組んできた特別活動「話し合い活動」を通して培ってきた力がベースにあり、学級、学年、全校というそれぞれの集団の中での仲間づくりが生かされてこそ、自信をもって仲間に思いを伝えたり、またそれを受け入れて評価したりする活動が可能になると考えています。

今日の子どもにおける読書活動はネット社会の発達によって大きく妨げられ、子どもが読書に取り組む時間は減少する一方であると言えます。しかし、その中で本校の取組のようにリアルな仲間とのつながり、思いの共有を通して、読書の魅力を再認識し、想像力をはぐくんだり、様々な生き方を疑似体験してみたり、言葉のセンスを磨いたり、そして的確に自分の思いを表現する力を身につけることができる、そんな読書の魅力を生徒の主体的な取組を通して伝えていきたいと思っています。



教育相談機関から 伝えたいこと



自分のこと 好きですか

暑すぎた夏が過ぎ、今は穏やかだけど夕暮れにさみしさを感じる秋。そしてもうすぐ体も心も寒そうな冬。待っているとまた、穏やかで意気込みを感じるような春が来ます。気持ちを季節に例えると、ポジティブだったり、ネガティブだったり人によって感じ方は違います。その時々でそれぞれの季節が訪れ、ずっと同じ季節だったりします。みなさんは今、どんな季節を生きていますか？

今、私は穏やかだけど心はさみしい秋のようです。このさみしい秋のような気持ちは物心ついてからどんな時もずっと私と一緒にいました。このことに気付いた頃、さみしさを受け入れ、私は私でいいと自分と向き合えるようになりました。自分のことを好きだと思えることは一歩を踏み出すチカラになると思います。ケースによって相談者さんにタイミングをみながら「ご自身のこと 好きですか？」と問いかけることがあります。反応は様々です。「…」無言の A さん。「好き!」とはっきり B さん。「無理。嫌いです」と C さん。また、「いつか好きになりたい。」「嫌いでもいい。」または、「自分がわからない」等々。相談室は来室された方々のどのような気持ちも大切に向き合いたいと思っています。

自分に問いかけ向き合った時、そこから始まる仕切り直しのチャンスがやってくるかもしれません。
みなさまは自分のこと好きですか？

相談室1 相談員



「見守る」とは何をすることか？



今回は、学校現場でよく使われる言葉であり、皆さん一回は使ったことがあるであろう言葉、「見守る」について考えてみたいと思います。

「見守る」という言葉は、特に子どもに何らかの問題が発生した後に、同じ問題が再び生じないかどうか「しばらく注意して様子を見ましょう」という意味合いで使用されています。しかし、本当にそのような意味合いのみで使用されているのでしょうか？私見としては、「見守る」という言葉が使用される時は、「どうしたら良いのかがはっきりとは分からないし、分からないのであれば子どもが同じ問題を起こさないことを期待しよう」という意味合いで使用されることが多いように思います。つまり、子どもの「問題」に対して「見守る」という関わり方の方針が決定されたものの、具体的に何をすることが決まっていない場合が多いと思います。大切なことは、子どもの「問題」に対してこれまでとは異なる対処方法（これが難しいのですが考えることが大事になります）が決定された上で、その方法を実際に試してみしてから「見守る」ことであり、これまでと全く変わらない対処方法の中で「見守る」だけなのであれば「どうしたらいいか分からないし、そっとしておく」とことと大差はないという認識も必要になるかと思います。

「見守る」という言葉は、子どもの「変化」を促す関わりを大人が試みていることが前提で使用される言葉であり、「変化を見守る」場合に使用されるものであると思います。

教育相談室2 専門員



「つなげる教育相談をめざして」



文部科学省から令和5年度の諸課題調査の結果が公表され、不登校児童生徒数がさらに増加したという報道がされました。データからは小学1年生の不登校や行き渋りの増加も気になるようです。

今年度は、「つなげる教育相談」を意識して相談機関関係者は動いています。この2年間関わる中で、「教育」の視点からだけでは児童生徒理解が進まなかったり、保護者の不安や困り感が整理できなかったりする状況にあることを実感してきました。今年度、相談業務に近江八幡市教育支援委員会委員長をしてくださっている小児科医、そして県域において様々な機関で精神保健師として多くの事例に関わってこられた保健師に関わっていただくことになったのも、医療や福祉の視点と連携が欠かせない状況になってきたことが背景にあります。

教育相談室においては相談件数の増加はさることながら、その中でも継続相談件数が増えていることが昨年度から今年度にかけての特徴です。相談者が心の言葉を紡ぎながら気持ちを整理されるプロセスはとても大事だと思います。また、相談したいという子どもからの電話もあり、面談を実施しています。教育支援センター「にこまる」においても30名近い申請があり、利用者も増えてきています。どこかにつながっていることや家族以外の人との関わりをつくるという意味で、次の一步につながる良い動きだと捉えています。

学校では、多くの先生方が可能な限りの配慮と粘り強い関り、支援場所の検討を続けてくださり、放課後登校や別室、あるいは教室で過ごす時間が増えてきた子どもたちもいます。「つなげる教育相談」を考えるうえで、どのタイミングで次のステップにつなげていくか、中学校卒業後を見据えてどの機関につないでいくとよいか、個々の状況を踏まえた確かなアセスメントをするためにも学校や関係機関ときちんと連携していきたいと考えています。

課題となるのは、公的機関や民間のどこにもつながっていない子どもがまだまだ多くいることです。また、子どもたちが表している姿をすぐに発達の課題につなげてしまうことにも気を付けなくてはいけないと思っています。

中学校卒業後の支えとなる場所を、ある一定必要としている子どももいます。機関連携を通して切れ目のない伴走型の支援を続け、一人ひとりの子どもたちがより良い社会自立を描けるよう関係者とつながりながら力を尽くしたいと思います。

相談業務統括員

第2回不登校等支援ネットワーク会議

不登校等支援ネットワーク会議では、小西保健師より「保健・医療・福祉との連携」についてお話しをしていただきました。他機関と連携する前にまずは、学校内で子どものことを相互理解すること、そして誰がどのような支援を行うのかそれぞれの役割を知ることが大切だと教えていただきました。また、関係機関と連携するためには、顔の見える関係の構築が大事です。医療につながるには時間がかかりますが、何回もアプローチをしていくことで伝えきれなかったことが伝わることも多いそうです。どのようなケースも一人で抱え込まず、みんなで考えること、そして「つなぐ」ではなく「つながりにいく」という姿勢が大切だと学びました。



第5回市初任者研修

日時 10月31日(木)

場所 八幡コミュニティセンター

□研修Ⅰ 講話・実習「読書指導について」

□研修Ⅱ 講話・フィールドワーク・協議



ブックトーク研究会『ぶっくあい』の市島恵子先生から子どもの読書活動とブックトークの起源や理念についてご講話いただきました。その後、「あかり ひかり」をテーマに市島先生がブックトークをしてくださいました。『ネコヅメのよる』・『チャーシューの月』・『エジソン』異なる分類の3冊の本がテーマを基に繋がっていき、会場全体が本の世界に包まれました。初任者の先生方も「未来」をテーマにシナリオ作りをし、ブックトークをされました。

市島先生からは、ブックトークは本に書いていることを教えるのではなく、新しい世界を知る喜びを子どもたちに届けるもの。子どもたちが「この本を読みたい!」という気持ちが湧くように本の魅力を伝えることが大切だと教えていただきました。



午後からは、「授業に使えるこの一枚」と題して八幡学区でフィールドワークをしました。旧伴家住宅や郷土資料館、八幡掘などをグループで見学しました。フィールドワーク後は、自分が選んだ一枚を基にどの教科で、どのような活用ができるかを協議しました。ある先生は、左義長の山車の写真を紹介されました。この写真を活用し、中学校2年生の英語の学習で、ALTの先生に近江八幡市を紹介するという学習を想定されました。その他にも生活科や家庭科、技術科などの活用方法を紹介されたり、同じ写真でも違う教科を選んだりされる先生方もおられました。近江八幡市を知ると共に身近な地域から教材を探す視点を養う機会となりました。

📖つながる読書📖



今年度、安土図書館が30周年を迎えます。そこで、安土中学校区の小・中学校の委員会が連携をして「安土図書館30周年企画」を実施しています。図書館では、図書委員会の児童生徒が「わたしと本」の関係について書いたポスターや小・中学生のおすすめの本などを展示しています。

11月は読書月間です。ぜひ、この機会に図書館とつながりませんか？



近江八幡図書館ではポップコンクールを開催中

近江八幡市教育研究発表大会のお知らせ

日時：令和6年(2024年)12月25日(水) 13:30~16:30

会場：安土文芸セナリヨ



今年度は、京都精華大学
前学長のウズビ・サコさんの
講演会を計画しています！